

コミュニティバスの事後評価について —文京区 B-ぐるの事例—

岩手県立大学 正会員 ○元田 良孝
岩手県立大学 正会員 宇佐美誠史
文京区 非会員 吉田 敦彦
さんぽみち総合研究所(株) 非会員 沼田洋一郎

1. はじめに

平成 7 年に運行を開始した武蔵野市ムーバスや平成 14 年の規制緩和後の廃止代替バスで自治体が運営するいわゆるコミュニティバスが全国に広まってきた。コミュニティバスの計画時には住民代表を集めてのワークショップの開催などで、より地域のニーズを反映した計画を作成する事例が多く見られるようになってきた。

一方運行開始後の見直しにはあまり積極的でない自治体が多い。東京都文京区では平成 19 年 4 月より区内を循環するコミュニティバス「B-ぐる」を運行しているが、平成 20 年 5 月に公募住民等による委員会が設置され評価と見直しを行った。運行開始後 1 年で住民等による評価と見直しを行うことはあまり事例がないので紹介する。

2. B-ぐるについて

文京区が区内の公共交通不便地域の解消のため、平成 19 年 4 月から運行している一部往復型の左回り 1 方向の循環型コミュニティバスで、文京区役所と JR 水道橋駅、JR 駒込駅などを結ぶ全長 11.3km、バス停数 33、1 周所要時間 65 分のバスである。運行間隔は 20 分で、毎日午前 7 時台から午後 8 時台まで運行しており、均一運賃で 100 円である。運行は民間業者が道路運送法 4 条に基づき実施し、文京区は補助金などによる運行支援を行い、平成 19 年度には約 38 万 6 千人を輸送している。

3. 評価方法

B-ぐるの当初計画には住民の参加はなく、コンサ

ルタントの調査に基づき、区とバス事業者が作成した。運行開始後補助金削減の必要性、行政に頼らない運行体制の確立、新規路線の検討のためプロジェクトの評価を実施することとなった。B-ぐるの評価は、住民を含めた委員会による評価、乗客数などのデータ、区民対象のアンケート調査の 3 点から総合評価することとなった。このため公募区民と行政、運行事業者、関連地域団体計 16 名から構成される「B-ぐる研究会」を平成 20 年 5 月に発足させた。実施内容を表 1 に示す。このうち AHP を用いたプロジェクト評価とロールプレイングによる改善案の検討について述べる。

表 1 B-ぐる研究会の実施内容

回	月日	主な内容
1	5/30	全国コミュニティバスの状況説明
2	6/27	B-ぐる説明、WS(評価項目抽出)
3	7/25	WS(評価項目の検討)
4	9/19	評価項目重み付け、区民アンケート案
5	10/30	評価項目検討、改善案提案
6	11/28	RG(改善案)
7	12/18	RG(改善案)
8	1/30	改善案の区回答、アンケート結果報告
9	3/5	報告書検討、支援区民組織の説明

注) WS: ワークショップ RG: ロールプレイング
(1) プロジェクト評価

研究会のメンバーによる評価はまずワークショップ形式で KJ 法により問題点を抽出して整理し、36 の評価項目からなる評価シートを作成し、委員に 5 段階評価してもらった。個人によって評価がばらつくのを避けるため、デルファイ法的な手法を用いた。まずメンバーを 3 グループに分け評価表に記入した後それぞれ討議を行い、グループごとに結果を発表した。その後他グループの発表を聞いた後もう 1 度同じ評価表に記入する方式をとった。次に評価項目をグルーピングして、以下の評価項目(大項目、中

キーワード コミュニティバス、事後評価

連絡先 〒020-0193 岩手県滝沢村巢子 152-52

岩手県立大学 TEL 019-694-2000

項目)を作成した。

- | | |
|-----------|-----------|
| 1) 事業の必要性 | 3) 事業の効率性 |
| ・ 需要への対応 | ・ 利用者の便益 |
| 2) 事業の妥当性 | ・ 採算性 |
| ・ 運行サービス | 4) 事業の有効性 |
| ・ 利用環境 | ・ 目標達成度 |
| ・ 波及効果 | ・ 継続可能性 |

次に項目ランクごとに1対比較を行い、AHP法により重み付けを行った。評価点と重み付けの関係を表したのが図1である。縦軸は平均値を1として表示してある。評価の高低、重みの大小で4つの象限に分けられる。問題があるのは重みが大きく、評価の低い象限であり、運行方法、交通不便地域の解消が該当した。これは区民アンケート調査にも見られたが1方向循環であること、バス同士の乗換えの不便さ、運行区域が文京区の東側のみとなっていることが原因と考えられる。

(2) ロールプレイングによる改善案の検討

ワークショップにより問題点が指摘され、いくつかの改善案も出てきた。提案をより現実的にするために、ロールプレイングによる改善案の検討が行わ

れた。従来のように委員が提案し、行政が回答する方法であると互いが自分の立場から主張しあい議論がすれ違う可能性があるからである。メンバーをランダムに3グループに分け、区民、行政、事業者の役割を与えた。区民役が改善案の提案を行い、それに対して行政役、事業者役がそれぞれの立場からコメントをするものである。主な提案は

終点でのバス乗継ぎ方法の改善

中間点でのバス乗継ぎ方法の改善

両方向での運行

であった。このうち については次年度から改善されることとなった。

4. おわりに

コミュニティバスは当初の目標設定どおりに目的を達成するとは限らないため、事後の評価と見直しは必要である。コミュニティバスの評価方法はまだ確立されていないが、運行開始後1年で住民を交えた本格的な評価を実施した例はまだ少ないと考えられる。なお、B-ぐる研究会の活動については以下のURLを参照されたい。

<http://www.city.bunkyo.lg.jp/kenkyukai.html>

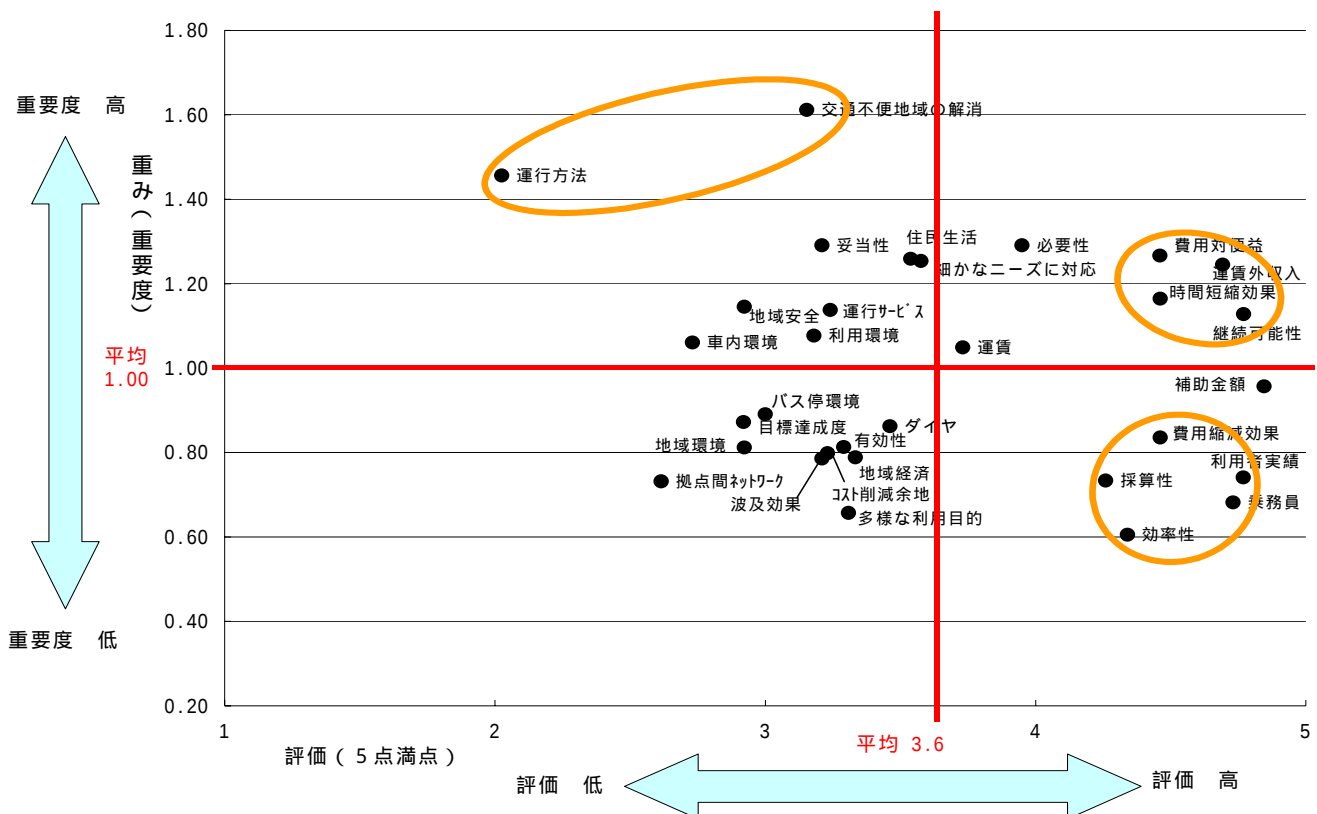


図1 評価と重みの関係